

ストリートパフォーマンス  
道化師

成平なりひら 一平いちへいた太

牧本聡史が安アパートのドアを開けると、大きな白い雲が眩しいほどの晴天だった。まさに五月晴れの上  
天氣が四日も続いている。

聡史は、自動車部品を手掛ける工場に勤めていた。百人ほどの小さな工場ではあるが、近代的な設備を整え、経営も順調なのか社長の顔はいつも明るい。だからといって恵まれた給与とはいかないが、正社員としての保障に守られた生活ではあった。もともと、毎日が同じ繰り返し作業に聡史は物足りなさを感じていた。

職場の同僚とは、よく話もするし稀とはいえ呑みにも出かける。しかし、心の底から友と呼べる仲間はいない。幼くして両親を交通事故で無くし、頼れる親戚もなく児童養護施設で育った聡史は天蓋孤独も同じだった。施設から通った高校を卒業すると同時に今の会社の独身寮に入居し自立を始めた。

自由を求めて会社の寮を出たのが七年前。それ以来聡史はこのアパートの住人として暮らしていた。今の会社に採用され十年が経った。来月には二十八度目の誕生日を迎える。

一昨年いっさねんの秋、休日の時間を潰す当てもなく横浜に出かけた時だった。路上で練り広げられるパフォーマンスを中心に人だかりができ、時おり拍手の音が沸き起るのが聞こえる。なにかのイベントなのか三十分ほどのパフォーマンスが終わると見物人の何人かが路上に置かれた籠の中に小銭を入れる。中には千円札も交じっている。しばらく間を空けてまた別のパフォーマンスが演技を始める。聡史は半日をこの路上で練り広げられているパフォーマンスに見入った。帰りの電車の中、じつと目を閉じ座席に背中をあずける聡史。何を想像しているのか時折、手が動いている。顔にドウランでも塗って先ほどのパフォーマンスのまねでもしているの  
であろうか。周りの乗客はクスクス笑いながら見て見ぬふりみぬぶりをしている。

翌週からは、仕事の休みを利用し、パソコンで何かを調べては出かけるようになった。カルチャーセンターにも通い、パントマイム、ジャグリング、マジックなど初歩的ではあっても多くの技を学んだ。自己流で

はあるがそれらしく、パフォーマンスができるようになるのに一年ほどを費やした。

洋服の裏地かと思うような生地で作った、星条旗を思い起こすかのような赤く太い縦縞模様のブカブカのズボンと黄色い燕尾服。燕尾服の胸ポケットからは赤いマジック用のハンカチが顔を出している。そしてその下に着こんだ白いTシャツには真つ青な蝶ネクタイがプリントされている。念入りに施した顔の化粧は道化師そのものだ。ピンポン玉をふた回りも大きくした真つ赤な鼻。緑色のシルクハットからはみ出した真つ赤なアムロヘア。大きなキャリーバックの中には、先の尖った赤い靴の他にジャグリングに使うボールやディアボロ。手品に使う造花にトランプ。風船にポンプ。手直し用の化粧道具。必然的に何泊かの旅行にでも行くのかと思うほどの大きなバックとなる。

聡史が住むアパートの大半は電気もガスも元栓が絞められ、時の流れを感じさせるには十分なほどに汚れきっている。大家にしてみればすべての住人が出て行くのを待っているのが見え見えの本音といったところなのかもしれない。六畳と四畳半の二部屋に小さな台所。トイレにキッチン、風呂までもが付いて三万二千円は破格の安さではある。もともと築四十年にはなる

うかという古アパートのあちこちのペンキははげ、まくれあがっている。鉄製の手摺も階段もさび、不用意に触るうものなら手が赤く汚れる。聡史はいつも注意深く階段の中央を降りて仕事場へと向かっていた。

「聡史くん、いつてらっしゃい。がんばってね」

二階の一番端の住人、菅谷多貴子が汚れることも気にせず手摺に身をあずけながら笑顔で手をふる。聡史もそれに応えるかのように軽く手を振る。頭をチョコンと下げながら投げキッスを返し、左手は何もかもを大きく包み込むように真横に伸ばす。シルクハットを持った右手をへその辺りに置いて、深々と頭を下げなおす。道化師としての今日の最初のパフォーマンスだ。

多貴子はこの安アパートの最古参の住人だった。年金暮らしの彼女は週の半分程度を健康維持を兼ねた清掃のパートに出ている。その甲斐があつてなのか七十歳には見えないほどに元気だ。多貴子の夫は散々女遊びを繰り返したあげく、六十の少し手前でこの世を去ったと聡史は本人から聞いたことがあつた。肺癌だったらしい。それなりに財産も有り不自由の無い暮らしではあつたが、広い家に独り住むには寂しいと、すべてを整理してこのアパートに越してきたらしい。子供

もなく、十五年も前のことだと聡史は聞いていた。このアパートには、多貴子の他に住人が二人いるがそれぞれ五十歳手前ほどの独身である。特に付き合いもなく素性も定かではない。勤めには毎日出ているようではあるが部屋から出てくることもなく月に一、二度、聡史とは顔を合わす程度だった。いわゆる二人ともがおたく族なのかもしれない。

聡史は小田原駅前のおしゃれ横丁に十時過ぎに着くと真っ先に商店街会長が経営する呉服屋に顔を出した。「おお牧本君、おはよう。頑張つてな」

聡史がおしゃれ横丁で月に二回のパフォーマンスをするようになって半年ほどになる。ここ以外にも、大型ショッピングモールなどにも定期的に出かけてはパフォーマンスを繰り広げている。

おしゃれ横丁は車両の通行止めとなる日曜日ごとに多くの人が行きかう。通りの中ほどに小さな広場が造られ、商店街の催し場となっている。一時はシャツター通りになりかけていたが、今の商店街会長の奮闘で昔の人通りを取戻し、活気をおびた商店街へと様変わりを見せていた。その集客力の担い手のひとつとしてストリートパフォーマンスの存在があった。

この横丁はパフォーマンス横丁の別名を持ち、ゴール

デンウイークに開かれるパフォーマンス祭りはマスコミにも取り上げられ、全国からパフォーマンス達が集まる。横丁を四つのエリアに分けて二十組ほどのパフォーマンス達それぞれのエリアを予定表に従って巡回し演技を行う。イベントの宣伝は横丁の各商店の店先に貼られた大きなチラシのみではあつても、いくつかのタウン誌が一月ほど前から一斉に煽ってくれている。中には特集を組むタウン誌さえある。タウン誌には必ず切り取りの投票券がつけられている。投票券には通しナンバーが記載されイベントの最後に抽選会が行われ、スポンサーから提供された数々の商品が当選者に渡される仕組みになっている。上位三名のパフォーマーには賞金と特典が与えられる。パフォーマンスにとっては荣誉の勝ち取りに力を注ぐと同時に大きな稼ぎにもなる。演技が終わり観客に差し出す籠の中にはいつもの二倍の心付けが投げ込まれる。

今年のパフォーマンス祭りでは聡史は観客側に回っていた。来年はエントリーしたいとばかりに他の観客とは違う視線を投げているのは先週のことだった。

十一時を廻ると通行人が増え始めた。先の尖った靴に履き替え、身なりの最終チェックをウインドウガラスで済ませる。聡史は大きなカバンの取っ手を伸ばし、

白塗りの顔をゆがませながら十メートルほど先のいつもの立ち位置へと向かった。すでにパフォーマンスは繰り広げられているのだ。行人のだけれども道化師の衣装をまとった聡史に足を止め、見入った。

「ママー、あのピエロさんの大きなカバン重そうだね」

五、六歳の男児の言葉は行人の視線をカバンに集めた。その瞬間、聡史はあるはずもない壁にでもぶつかったかのような仕草を見せながらしりもちをついた。「あっ、何かにぶつかったよ？」

男児の言葉はさらに行人の視線を聡史に向かわせるに絶妙なタイミングで発せられた。それは前もって打ち合わせがなされたかと思えるほどであった。聡史はおもむろに立ち上がり、左の手でわざとらしく尻をなぜながら大きなカバンをヒョイと持ち上げ、見えぬ壁を廻り込んで避け、残りわずかな立ち位置までスキップをしながら向かった。

「ママー、あの人、面白いね。カバンも重たくないみたいだし、何にもないのにぶつかって転んで」

「ほんとね。ちよつとみていこうか？」

母子に誘われるように何人もの行人が聡史の周りを囲んだ。

聡史は地面に線でも引くかのように、自分を中心に

円を描く。観客との間合いを決めるためだ。「さあ、これから始めるよ」と、いわんばかりに緑の帽子を右手で取りへその辺りに付ける。さらに、左足を少し後ろに引いて腰を曲げながら深々と頭を下げた。誰からとなく自然に拍手が沸いた。

聡史が道化師へと変わる線引きでもあった。パフォーマンスはすべてがサイレントで構成されている。どの演目でも言葉は一切発することはない。手や顔の表情に合わせ躰全体を使って観客に信号を送る。観客はその時々で笑い、感動し、時には食い入るような視線を道化師に投げかける。

さつそく道化師はカバンから赤や青のゴムボールを取り出し地面に並べた。すると一個のボールが一番前に陣取った先ほどの男児の前に転がった。狙い通りだ。道化師は満面の微笑みを浮かべ頭を下げると男児の前へと足を一步踏み出した。二歩目の足を出すと同時に誰にも見えない壁に再びぶつかり、さも痛そうに額を撫ぜ、壁の大きさを探った。壁は回り込むことができないほどに大きく道化師は頭を抱え途方に暮れる。迫真の演技が観客の心をとらえ始めたのか、道化師の周りは静かさの中にも押し迫るかのような視線の圧が円の中央へと覆いかぶさる。パンダの逆をいくような目

の周りの白塗り、濃い目のアイシャドウが瞳の表情を増幅させる。赤く塗った大きな唇の動きも周りの白塗りが細かな動きを豊かな表情へと変化させる。薄紅の頬、ピンポン玉を二回りも大きくしたような鼻。この顔のパーツ一つ一つが豊かな表情を造りだすのに大きな役割を持っている。さらにそれを支える躰全体を駆使したボディランゲージ。これこそが道化師の命とばかりに波動を切れ間なく送り続ける。言葉を発しない真剣勝負が道化師と観客の間に繰り広げられる。観客の息遣いを探るかのような大小さまざまな間合い。

男児は手にしたボールの扱いに困ったかのように母親の顔を見上げる。その瞬間、道化師は何かをひらめいたかのように手を叩き、再び満面の笑顔を浮かべ男児を円の中央へと招き入れた。母親に背中を押され、男児がどこにあるのかわからない壁を探るかのように手を突き出しながら足を踏み出す。どこからともなく「クスクス」と小さな笑いが漏れる。

「ピエロさん、ぶつかるものなんてなかったよ」

男児の素直さに小さな笑いが大きく広がった。道化師は男児の目線に合わせるかのように腰を落としボールを受け取るとそっと抱き寄せた。オーバーアクションではあっても心を込めた仕草は男児の心を解きほぐ

す。

道化師は上着のポケットから棒付の飴を一本取り出し、おどけ顔で微笑みながら男児の手に持たせると手を振って母親の元へと押し出した。

「今日の演技は、この子を中心に組み立てれば成功する」

声に出すことなく道化師はつぶやいた。

いつもパフォーマン스가成功するとは限らない。幾つものレパートリーを持つてはいてもすべてを披露するわけではない。総花的に演技を繰り広げても客の視線を釘付けにすることはできない。この一年ほどで何度も経験し学習はできている。

もう一度ボールを手にするるとジャグリングを始めた。三個から四個、五個目のボールが手から離れると同時に拍手がわき上がる。道化師の手はせわしなく落ちてくるボールを左手で受けると同時に右手に送り、そして再び上に放り投げられる。

大きなカバンを引きずるところからここまで観客の目を引き寄せ続けることができている。四十分あまりの演技の滑り出しは順調のようだ。どんなパフォーマンスも演技の途中で何回も繰り返しこの確認を観客の動向から探る。受けが悪いと感じることもあれば、のっ

ていると感じる時もある。どちらであろうとその原因はパフォーマンスが醸し出すオーラに掛かっている。聡史が最も強敵とするパフォーマンスは、日本猿のどん太とよし子である。愛くるしい動きと表情。宙返りに輪潜り、切れの良い技は小さな子供から大人まですべての観客の心をわしづかみにする。その結果、すべての演技が終わり観客の前に差し出されるさるの中には多くの心付けが投げ込まれる。

「あいつらに勝てるなんてことは・・・」

奴らはプロとしてこのパフォーマンスで生計を立てている。聡史の道化師としてのパフォーマンスは生業ではない。時には製造員として得る給料よりも多い心付けを得る月もある。それでも趣味の領域を出ることはない。長い人生の中にあつて不安定な要素を持つパフォーマンスでは安定した家族生活は送れない。聡史の生い立ちが物語っている。

聡史が施設に入ったのは小学三年生の時だった。車に飛び込んだ両親にどんな事情があつたのか詳しくは知らされてはいない。しかし、物心ついたころから毎日がひもじい思いの中で生きてきたような記憶しかない。だれもがみんな同じだとも思っていた。そうではないと思ひ知らされたのが小学校にあがつてまもなく

だった。多くのみじめさを味わいながらの学校生活ではあつたが負けまいと勉強に励んだ。ゲーム機や高価なおもちゃなど与えられることがない分、持て余すほどの時間を独りで過ごさなければならぬ。おかげで成績はいつもトップだった。進学校といわれた高校でも成績は維持できたが大学への道は選ばなかつた。多くを望んでいるわけではない。ごく普通の生活のなかで家庭を持ち、子供たちと共に笑いたいと考えていた。しかし現実はそのなかに甘くはなかつた。結婚を考えた相手もいたが、施設育ちの高卒というだけで相手の両親に反対され、あつてなく去つて行つた。あれから二年、聡史はいまだにその時のショックを引きずりながら道化師を演じている。

聡史の演技は笑いを取り入れたマジックへと移り、コミカルな演技にだれもが惜しむことなく拍手をする。男児さえも声がだして笑っている。そんな中に見覚えのある女の観客を、聡史の目がとらえた。女の視線は道化師に向けられることなく定まつてはいない。気に掛けながらも次の風船演技へと移つた。

マジックさながらにいたるところから風船を取り出す。男児の耳の後ろからだつたり観客の手のひらだつたり。そして風船を膨らましさまざまな形に作り上げ

て行く。くま、ライオン、プードル、蟹と。

先ほどの女の観客の手が隣の老婦人のカバンの中を狙ったその瞬間。道化師は老婦人に駆け寄り幾つもの風船を取り出し、まわりの目を引いた。目的を失った女は観客の輪を後にしてどこかに消えた。

すべての風船の作品は観客に配られる。これで四十分の演技は終了となり、最後のパントマイムとなる。緑の帽子を取り、観客からの心付けもらうための最終演技となる。パフォーマーにとって最もわくわくすれば緊張もする瞬間である。この瞬間に魅了されパフォーマーを続けているのかもしれない。

道化師が帽子に手を掛けたそのタイミング。先ほどから怪しい動きをしていた黒い雲が一気に商店街に覆いかぶさり、遠くで鳴り響く雷とともに大粒の雨が降り出した。観客は逃げ惑うかのように一斉に散ってゆく。道化師のことなど一瞬にしてなかったことにしてしまった雨。悪夢の滴が容赦なく道化師に降り注ぎ足元で小躍りしている。

「ピエロさん、ありがとう。たのしかったよ」

雨音にかき消されまいと大きな声を張り上げる男児に道化師は、雨に叩かれながら最後のマイムで応える。雨に濡れ色合いの変わってしまったカバンを手に聡

史は商店街の外へと向かう。躰に貼りつくような衣装では、いかに雨が上ろうと二度目のパフォーマンスを行うには無理がある。ひとまずはアパートに戻るしかない。言いようのないむなしさを感じながらただの通行人としてうつむき加減で足を運ぶ聡史。そこには道化師としてのオーラーは何も発してはいない。派手な化粧と衣装をまとった男でしかない。雷雨によって演技の頂点ともいえる道化師としての最高の笑顔を振りまくことができなかった無念さが足運びにも表れていた。

スクランブル交差点に出ると雨が上がり、まばゆいばかりの太陽が雲間から顔をのぞかせる。大きな虹が聡史の沈んだ心をなごませる。信号待ちをしていた聡史の目が向こう側の喫茶店に釘づけとなった。道路側に設けられた長いテーブルに何人もの客がコーヒを飲んでいる。スマホをいじりながらの客や、なにかに目を落としながらコーヒークップを手にしている。ただぼんやりと外を眺めている客もいる。

「やっぱ、真由子だ」

聡史は、客の中に見覚えのある顔を見つけた。道化師のパフォーマンスに夢中になっていた老婦人のカバンの中を狙っていた若い女。何に目をやるでもなくぼ

んやりと外に視線をなげている。何を思ったのか聡史は歩行者用の信号音に押されるように道化師の顔に戻った。通行人の足が一步前に出かかったその時、道化師は持っていたカバンを手放し、マイムを始めた。通行人にとって妨げでしかない。道化師を避けて横断歩道に足を踏み入れる。だれもが怪訝そうに振り返りながら足を運ぶ。そんなことを気にすることもなく道化師はマイムを続ける。通行人の足を止め観客としての輪をここに作ろうとしているわけではない。交差点の向こうの喫茶店でコーヒーを飲んでいる白井真由子の目を引くためだけに演じていた。三回目の信号音が交差点に響いた。真由子の視線が道化師に投げられている。こころなしか真由子の顔がゆるんでいるようにも見える。四回目の信号音とともに聡史はカバンを手にした。喫茶店をめざして交差点を渡るとガラス越しに真由子の前に立った。

「真由子、おれだよ。聡史」

キョトンとしている真由子に、聡史はもう一度、大きく口を開けゆつくりと「おれだよ、さとし」

女の顔がゆるんだ。懐かしさがあふれ出しているのがわかる。人恋しきと言った方が正しいのかもしれない。その瞬間「さとし兄ちゃん？」と女の口がゆつく

りと大きく問い直した。

白井真由子と聡史は同じ児童養護施設で育った。とはいっても真由子の方が施設での生活は聡史よりも長いものだった。白井の性は真由子が施設に預けられた当時の市長の性であり真由子のなづけ親でもあった。二重瞼の愛くるしい顔とは裏腹に、常に影をもった真由子ではあったが、聡史が施設にやってきてからはいつも聡史の後を追いかけていた。

「真由、元気か？ 今、どうしている？」

聡史は真由子が老婦人の手提げの中を狙っていたことには触れることなく気遣った。

「うん、元気でやっているよ」

真由子も財布を狙っていたことに気付かれ邪魔をされたことに触れることなく明るさを装った。陰の部分に隠すための明るさでもあった。

「真由、お昼は？ 久しぶりだし、ごちそうするよ」

「ほんと、ラッキー。でも、そのかつこうじゃあね・・・」

「さっきの雨でずぶぬれ、いったん着替えに帰るさ。行って帰って・・・十二時半にはここに帰ってくる」

聡史は真由が老婦人のカバンの中身を狙うような行為をやめさせたかった。おそらく初めてではないだろう。いつかは警察に捕まることになる。真由のこれま



での人生は聡史と同じようにけして平坦なものではなかつたかもしれないが、だからこそ平穩な暮らしをして欲しいと願つた。

「私も聡史兄ちゃんについてゆく。独りで待つてるのやだもん」

わずかに二十六年ではあるが、真由子のこれまでの人生は待ちの連続の人生だつた。産まれたばかりで捨てられ、乳児院にあずけられた。名づけ親は当時の市長だつた。

一年半を乳児院で過ごし、そのあと児童養護施設での生活を余儀なくされた。それでもいつかは産みの母が迎えに来てくれると信じて待つた。いや、今でもその思いは断ち切れてはいない。高校を卒業すると同時に製菓工場の寮生活を始めた。他人ばかりではあつても施設の生活はそれなりに賑やかだつた。プライベートを確保するための社員寮の個室には小さな笑い声も笑顔も落ちてはいない。自立した人生を歩まなければと自分に言い聞かせはしてもこれまでには孤独さと将来における不安に駆られる毎日。涙することも一度や二度ではなかつた。同じように寮生活をする同僚とも仲良くはできても盆や正月には独り寂しく寮に取り残されることになる。

「いつか私にも本当の王子様が迎えに来てくれる」と、淡い夢に抱かれ、まだ見ぬ男を待ち続けている。何人かの男が真由子の容姿に引かれ現れもした。が、付き合いは始まるものの親戚も肉親もない施設出身と判ると躰だけを求め消えていった。真由子は何度かの学習の末、独りで生きてゆくことを選択した。そして目的を成すためにひたすら貯蓄する決意をしていた。もつとも真由子の稼ぎでは生活するのがやつと。わずかに残る小銭を郵便局に持ち込むものの残高が目に見えて増えて行くには程遠い現実があつた。

魔が差した。まさにこの言葉がびつたりなほどのことが真由子の目の前に現実としておこつた。ショッピングモールの一角に設けられた休憩所で缶コーヒを飲んでいた時だつた。隣に座っていた裕福で品のありそうな老婆が、手提げカバンを椅子に置いたまま席を立つた。カバンの中身は丸見えの状態だつた。「おぼさん、カバン忘れてるよ」真由子は出そうになつた言葉を呑み込んだ。老婆が視界から消えると真由子は辺りを見回しながらそつと腰を上げカバンの前に立ち中を見た。大きな財布が露出している。

真由子の心臓が大きな音を立て始めた。震える手がカバンの中へと伸びる。財布を開けると一万円札が十

枚ほど入っていた。真由子は三枚だけを抜き取ると財布を戻しその場を離れた。さらに大きく心臓が音をたて、震えは全身へと広がっている。一刻もこのエリアから遠くへ離れなければと思いつつも大きな木の鉢植えの陰から老婆が戻ってくるのを待った。長い時間が流れたような思いはあったが、老婆が席を離れて五分も経ってはいない。巡回の警備員が置き忘れのカバンに気が付き方向を変えた。同時に老婆が小走りで席に戻ってきた。

「お客様の持ち物ですか？」

警備員が優しく声を掛ける。

「すみません。そそっかしくて」

老婆が恥ずかしそうに応える。

「お財布がすぐに見えるところにあるようですが、一応中を確認してみてください」

警備員に促されて老婆が財布を開けて見たものの異常に気付くことなく軽く頭を下げその場を去って行った。カバンが本当にあの老婆の物なのかなど確かめることなく警備員は老婆を見送る。老婆の身なりと物腰はあの高級そうなカバンと吊りあつて見えたのだろう。あれ以来、真由子は人込みの中を好んで歩くようになった。しかしチャンスはめったにはやってはこない。

人生を台無しにはしたくはない。無理などしなくても正職にもついている。この半年で三回ほど心臓を高鳴らせた。今日が四回目の出来事だったが聡史の目に止まり、手を伸ばすことなく心臓の高鳴りは消えた。

「真由、ここで待ってて。すぐに戻ってくるから」

聡史はアパートに着くと真由子を待たせ、せわしい音を立てながら古びた階段を駆け上がった。

「あら、お嬢さん。聡史君のお知り合い？」

聡史が部屋に消えると同時に、菅谷多貴子がコンビニの袋を下げて帰ってきた。このアパートの住人はわずかに四人であり、年齢と身なりからして聡史の知り合いだと直感してのことだった。

「はい」

真由子は品のよさそうな老婆多貴子に戸惑うことなく素直に答えた。

「そう、でも彼ならおしやれ横丁よ」

「いや、雨でずぶぬれでそれで着替えに」

「あらそうなの。だめね、聡史君も。こんなきれいなお嬢さんを外で待たせるなんて・・・いいわ、私の部屋にいらっしやい美味しい紅茶を入れてあげるわ」

「でも・・・」

「大丈夫、聡史君にも声を掛ければ。さあ、いらっし

「やい」

真由子は複雑な思いだった。聡史の知り合いとはいっても十年ぶりでの再会である。今の聡史については何も知らない。ましてヤストリート・パフォーマーをしている聡史と秀才と言われた聡史を結び付けることすらできないでいる。誘われるままにここまでついてきたのは単に懐かしさからだけなのかもしれない。いや、道化師に見入っている老婦人のカバンの中身を狙ったことへの罪悪感と、何か言い訳をしなくてはとの思いからなのかもしれない。強引なまでの多貴子の手に引かれ真由子は階段を上がった。

「聡史君、こんな可愛い女の子を外で待たしちゃあだめよ。私の部屋でお茶を飲んでいながら着替えたら寄ってね」

「えっ、あつ、はい」

玄関先の多貴子の声に、何が何だかわからないまま聡史は返事をするしかなかった。

「どうなの？ いつからなの？ 聡史君にこんなに可愛い彼女がいたなんて。ちっとも気付かなかったわ」  
多貴子は真由子に紅茶を差し出しながら自分のことのように嬉しそうに笑みを浮かべた。

「いえ、聡史に……。彼とは十年ぶりの再会なん

です」

「あらそうなの。じゃあ、もとかれ？ 何で聡史君と別れたの？ あんない子めったに見つからないわよ。もう一度やりなおさない。私が保証するわ。子煩悩ないだんなさまになるわよ」

「えっ、あつ、はい」

強引なまでの多貴子の押しに、思わず真由子の口から出てしまった。

「そう、良かった。このクッキー私が焼いたの。美味しいわよ」

なぜか多貴子のはしゃいでいる。

「私から見てもお似合いよ。きっと可愛い赤ちゃんが産まれるわ」

多貴子には兄弟がない。おばやおじもすでに他界している。何人かの従妹はいるがお義理での賀状の付き合いでしかなく、街ですれ違っても顔すらわからない。わずらわしさが無く気楽ではあるがやはり孤独は寂しい。そんな中であつて気さくに声を掛けてくれる聡史が多貴子には息子のようにさえ感じていた。

「すみませーん。真由、出かけるぞ」

聡史は着替えを済ませ、多貴子の部屋に飛び込むかのようにドアを開け、中にいるだろう真由子に声を掛

けた。

「聡史君、とりあえず中でお茶でも飲んでつたら？」

多貴子は、せっかく親しくなりかけた真由子を部屋から出したくはなかった。多貴子の誘いをむげには断りきれない聡史は靴を脱ぐほかはなかった。

「聡史君、今日は散々だったんだって？」

真由子から一通り事情を聴いた多貴子は同情するかのうに言葉が続けた。

「まあ、そんな日もあるわよ。さあ、どうぞ」

多貴子は紅茶を出しながら、聡史の顔を見て聞いたことが山ほどあるとばかりに目を輝かせた。

「多貴子さん、そんなにはゆっくりもしてられないんです。商店街の会長さんに黙って帰ってきてしまったので報告に……」

「あら、そうなの。ゆっくりと二人のことを聞きたかったのに……」

聡史には、多貴子が何を聞きたがっているのかは想像ができた。多貴子が聡史を息子のように思っているのと同じように聡史もまた、多貴子のことを身内のように慕っていた。だからといって今、真由子のことについて話さなければならぬようなことは何もない。同じ施設で育った真由子と十年ぶりに出会った。それ

だけのことしかない。

「真由、何食べたい？」

一着しかない道化師の衣装をずぶ濡れにしてしまい、この日のパフオーマーを断念した聡史は、商店会の会長に詫びを入れたあと二人は肩を並べて商店街を歩いた。海鮮物が食べたいという真由子に合わせ、小田原港に揚げられた朝獲れの鮮魚を売りにしている店のれんを潜ることにした。真由子はメニューを眺めて散々迷った挙句、女性向けの特別ランチを、聡史は、おまかせランチを注文した。

「真由、元気があった？ 今何してる？ どこに住んでるの？」

「いっぱい聞くのね？」

注文取りの店員が背中を向けると同時に聡史が口を開いた。と同時に真由子は、次に何を聞いてくるのかと身構えたのを誤魔化すかのように微笑んだ。

「俺は、高校を卒業と同時にK製作所で製造員として今も働いている。きつとこのまま……定年までかな。

休みの日には今日みたいにおしゃれ横丁で道化師を……趣味と実益を兼ねて」

「ふーん。聡史兄ちゃん彼女はいないの？」

「いないよ。なかなか難しくくてね」

養護施設育ちであることがわかると人は離れて行く  
との思いを込めて難しいと聡史は口にした。

「私もおんなじ。高校を卒業と同時にF製菓の寮に入  
ってチョコレートを毎日作っているわ」

真由子は何もかも聡史と同じだった。このままこの  
菓子工場で働き、年を取って行く。恋人ができてもや  
はり施設の出身であることがわかると去って行く。

「真由」

真由子はドキッとした。覚悟を決めて聡史の後をつ  
いてきた。老婦人のカバンの中身を狙っていたことを  
とがめられると。

「真由、休みの日に俺との都合が合えば道化師を一緒  
にやらないか？」

「ええっ、道化師？ 私が？ わりわり」

真由子は絶対に無理とばかりに手と顔を左右に振つ  
た。

「そんなことはないさ、誰だってできる。おれが教え  
るよ。もつとも我流だけだね。最初のうちは助手をし  
てくれたらいい。稼ぎも折半だ。そうだな、一回のパ  
フォーマンスで五、六千円にはなるから・・・一日に  
最低三回は、気分次第で四回の時もある。ちよつとし  
たアルバイトかな」

聡史は立て続けに話した。少し興奮をしているのか  
もしれない。いや、何としてでも真由子をパフォーマンス  
に誘い込みたかった。そうすれば他人のカバンの  
中身を狙う暇などなくなる。わずかかもしれないが小  
遣い程度の稼ぎにはなる。真由子にも聡史の本当の胸  
の内が手に取るように理解できた。発覚すれば警察沙  
汰になる行為を責めることもなく、パフォーマンスを  
することを勧めていると。パフォーマンスをすること  
になれば、まずは観客の前に立てるだけの練習をしな  
ければならない。すくなくても当面は仕事以外の時間  
をこのことに費やす必要があった。

「本当に私にもできる？」

真由子も他人のカバンの中身を狙うことがどんな結  
果につながるのか知っていた。前科者になるわけには  
いかない事情も抱えている。これを機にやめることが  
できるかもしれないと思い始めていた。

「もちろんさ。真由はお手玉が得意だったよな。おば  
あちゃん先生によく褒められていたじゃないか」

「聡史兄ちゃん、あれから何年たっていると思ってい  
るのよ」

「大丈夫、三つ子の魂百までってね」

「なに、それ・・・」

「ボールのジャグリングは三、四個ならすぐにできるさ。それよりかマイムだな」

「マイム？」

「パントマイム。聞いたことない？」

「あるよ。何もないのにいかにもあるかのように振りをするのでしょ」

「そうそう、壁なんてないのに、いかにも存在するかのようにつつかって痛がったり、壁をよけるふりをしてみたり、重たくもないカバンをさも重たいかのよう

に大げさな振りをするあれ」

「そんなこと私にできるのかな」  
「大丈夫、最初はぎこちなくてもすぐにできるようになるさ」

「ユウモアたっぷりにならないとだめよね」

「少しはやる気になってきたな」

「これからは、仕事が終わったら聡史兄ちゃん家に通う」

「マイムの練習をしながら、ジャグリングと風船芸とマジックの相方の練習だな。一か月もすれば観客の前に立てるようになるさ」

「ええー、たった一か月で・・・」

「そう、一か月。それまでは多貴子さんに観客役をし

てもらって人前に慣れることかな」

「わかった。やってみる」

真由子は聡史から咎めを受けることはないと確信したのか安心しきったようにランチを平らげた。聡史も真由子の笑顔から、あえて昼間のことに触れなくても二度と同じような過ちははしらないと実感できた。同じ境遇で育った聡史と真由子とはもに有意義な時間をすごせたと感じていた。

「聡史兄ちゃん、もう絶対にしないからね」

「わかってるよ」

食事を済ませ、別れ際に笑顔で手を振りながら真由子が口にする聡史も笑顔で応えた。

翌日から真由子は仕事を終えるとまっすぐに聡史のアパートに通うことにした。もともと、聡史の方が帰りが遅く、いつも多貴子の部屋で待つこととなった。

「真由ちゃん、いつそのことこっちに越して来たら？  
そうしなさいよ。そう、それがいいわ」

真由子が聡史のアパートに通い始めて二週間ほどしてからだった。台所に二人並んで夕食の後片付けをし

ながら多貴子が突然口にした。

「えっ、多貴子さん家？」  
「違うわよ。聡史君の部屋に」

「そんな・・・」

「だって、その方が何かと都合がいいわよ。どうせ、いずれはそうなるんだから。あなたたちにとつて初めて本当の家族つてことになるのよ。家族つていいわよ」

真由子には戸惑いがあった。聡史のことは子供のころから兄のように慕ってきた。久し振りの再会も嬉しくあったが兄としての思いからだ。男として見たことがなかったとはいわないが、それは小さなものでしかなかった。多貴子に言われて改めて男としての聡史を意識した。しかし真由子には、多貴子にも聡史にも言えないでいることがあった。そのことを隠したまま多貴子の話に乗ることはできなかった。

「旦那様の帰りを待ちながら台所に立つ。女として充実感のある幸せを感じることでできるわよ。そして子供を産み育てる・・・」

多貴子も同じ幸せを感じながらこれまで生きてきたもつとも、子供を授かることのできなかつた寂しさは今も消えることはなかった。

「ごめん、お待たせ」

八時少し前に聡史が残業を終え多貴子の部屋のドアを開けた。

「聡史君、夕飯は？」

「いや、真由の帰りが遅くなるから練習の後で・・・」

真由子がパフォーマンズの練習に通うようになって毎日のやり取りだった。そして、そのまま多貴子の部屋に聡史が上がり込み、居間をストリートに見立ててのパフォーマンズが繰り広げられた。

「いいわよ、真由ちゃん。本当に重いバックを引いているようにみえるわよ」

真由子は多貴子に褒められながら演技を続ける。毎日同じシーンの繰り返しだった。二人の道化師が路地から重いカバンをそれぞれが引いて現れる。四メートルほどの間を開けて二人が向き合う。観客にお辞儀をし、投げキッスを送る。さあ、これからパフォーマンズを始めるとアピールして、それぞれがカバンを開ける。最初に披露するのは数個のボールを使ったジャグリング。聡史のボールは白。真由子は赤。しかし、実際にボールは無い。あるように見せるのだ。しかも色がついているようにアピールしなくてはいけない。赤いボール一個だけを取り出し宙に投げ、落ちてくるのを受け取ると同時に消す。マジックを兼ねているのだ。しかしそのボールを受け取るのに失敗をして相方の方へと転がってしまう。二人ともが同じ演技をし、転がったボールを取りに行こうとするが見えない壁にぶつ

かつてしまう。何度試みても壁がある。回り込もうとするが壁は大きく途方に暮れる。そして今度は本物のボールを取り出し、誤って転がしてしまう。拾う役は観客だ。観客は小さな子供だったり、大人だったりと相手によって仕草を変える。そして最後にご褒美を上げてお礼を伝える。この十分ほどの演技を何度も何度も繰り返し返した。

「真由、もうすぐ十時だ。今日はここまでにしよう」

「真由ちゃん、もういつでもデビューできるわね。うまくなったわよ」

「ほんと、ありがとう多貴子さん」

真由子の住む寮は電車で十分ほどの所にある。十時十八分発の小田急線にのれば十時半には寮のドアを開けることができた。真由子はいつも聡史の部屋で繰り広げた演技を、部屋の電気を点けるなり姿見に映る自分を見ながら何度も復習していた。その甲斐があつたのか上達はやく、聡史も多貴子も驚いていた。

「聡史君、真由ちゃんにこっちに引越してくるようにつて、言つといたからね」

「こっちつて？ このアパートに？」

「そうよ」

「だって、ここ新しい住人は入れないんじゃないかっ

た？」

「なに言つてるのよ、聡史君の部屋によ」

「えっ、おれの部屋？」

「そうよ、一緒に住めばいいのよ。籍を入れなさい。誰も邪魔する人なんていないでしょ。大丈夫、真由ちゃんだってまんざらじゃなかったわよ」

真由子のパフォーマーとしての練習に多貴子を巻き込むことになってから毎夕食を多貴子の部屋で取ることにした。多貴子が言い出したことだった。ただし、二人の食費は聡史が負担することで多貴子と合意ができていた。もつとも形ばかりの食費であり、持ち出しの方が多くはあつたが家族の真似事ができると多貴子は喜んだ。遅めの夕食をとる聡史に多貴子が真由子との結婚を勧める。というよりは因果を含めると言つた方が正しいのかもしれない。

「いいわね、聡史君。あした真由ちゃんが来たらこっちに来るように言うのよ」

「・・・」

聡史には返事ができなかった。真由子は美人だし性格も申し分はない。共に施設育ち、何よりも気心がしれている。だが、女というよりは妹として見てきた。

その夜、聡史はなかなか寝付けなかった。



「聡史君、いつてらっしゃい。いい今夜、真由ちゃんに言うのよ」

翌朝、聡史が出かけるのを察知した多貴子が手すり越しに聡史に手を振った。聡史もそれに笑顔で振り向き応えた。

「真由、近いうちにおれの部屋に越してこないか？会社には結婚するから寮を出るって届けなければい」

次の日、練習を終えて帰り支度の真由子の背中に聡史が投げた。

「ありがとう。聡史兄ちゃん」

真由子はそれだけを口にし、振り向くこともなく駅へと急いだ。

「おかしいわね？ 真由ちゃん。何か問題でも抱えているのかしら。一二つ返事でOKすると思ったんだけど・・・」

「いいよ、多貴子さん。この話はもうしない。真由がその気になるまで待たさ」

聡史は妹としてではなく一人の女として真由子を見つめなおした結果の結論ではあった。が、真由子にも兄としてではなく男として見つめなおすには時間が必要なのだろうと思った。

翌日、翌々日と聡史の携帯電話に今日の練習は休む

と真由子からメールが入った。その都度、聡史は了解とだけ打ち返した。真由子が練習を休むようになって五日が過ぎた日曜日の朝、聡史は道化師の衣装を着てアパートの階段を降りた。心なしか、寂しさが背中に漂っているかに見えなくもない。

「聡史くん。待つて」

アパートの手すり越しに多貴子が聡史に声を掛ける。

「真由ー」

多貴子の後ろには聡史に負けないくらいの派手な衣装にメイクをした道化師が恥ずかしそうに立っていた。

「さあ、いつてらっしゃい。新しいピエロのコンビのデビューよ。がんばってね」

多貴子が真由子の背中を押すかのように階下へと送り出す。聡史の顔が急にほころび、右手を腹に当て、左の手を大きく広げながら膝を軽く折る。招き入れのマイムだ。二人の肩が並びカバンのキャスターが飲みを伝えるかのように音をたてた。その音に伝えるかのように「私も後から行くからねー」と、多貴子が大きな声で二人を見送った。

デビューは大成功だった。いつもより観客が多かった。当然のようにご祝儀も多かった。その中には多貴子が出した千円札もある。四回の演技を終えたのは五

時を少し回っていた。二人は商店街会長に挨拶をすませ多貴子の部屋に帰った。

「多貴子さんありがとう。大成功だった」

「そう、よかったわね。真由ちゃんもりっぱなパフォーマンスだったわよ」

「今日の上りは全部、真由が持ってたっていいよ。その衣装高かったろう」

「違うの、この衣装は多貴子さんからのプレゼント」

多貴子は練習に來ない真由子を氣遣って道化師の衣装を揃え、真由子の寮を訪ねていた。

「そんなことより真由ちゃん、聡史君に話さなければいけないことがあるのでしょ」

真由が練習を休んだのは、聡史の思いは嬉しかったが素直に受け入れることができないほどの問題を真由子は抱えていたからだだった。そのことをどう話せばいいのか真由子にはわからなかった。それを話すことによつて聡史の思いが変わることだつてある。真由子は多貴子に何もかもを打ち明けていた。

「えっ、何？」

聡史の顔に不安が走った。真由子が何を抱え悩んでいるのかと。一瞬ではあつたが、真由子の両親と男の黒い陰が脳裏をよぎつた。

「聡史兄ちゃん・・・。聡史さん、実は私には一歳と五か月の男の子がいるの。今は、横浜の乳児院にあずかつてもらつてゐるの」

「どういうこと？ 乳児院につて？ だめだよ、どんな理由があるかと母子おやこが離れて暮らすなんて。そんなこと真由が一番わかっているはずじゃないか。いいよ、おれが養子親になる。明日にでも横浜に迎えにいこう」

聡史は間髪を入れずに真由子を諭すように口にした。どんな事情があろうと真由子の子供なら無条件で受け入れてやろうと心の底から思った。乳児院から救い出してやりたいとも思つた。親の愛情を思いつきり味あわせてやりたいと思つてのことだつた。

「ほらね、聡史君ならそう言つてくれると信じてた」

多貴子は半分得意げな顔をした。真由子は大粒の涙を流しながら、子供を産み乳児院にあずけなければならなかつた事情を聡史に打ち明けた。将来を約束したにも関わらず相手の男は真由子が臨月を迎えると同時に姿を消した。相手の男が医師だったこともあり、製菓会社には偽の診断書を作成して六か月の長期休暇を取つていた。そして、男が用意したアパートに移り住んで出産の準備に入った。男は真由子のアパートに足繁く通つては來たが泊まることもなく帰つて行つた。

そのことに真由子は不安を感じてはいたが何かを口に出すことはできなかった。医者という職業に対し、施設の出であることの負い目が真由子にはあった。やがて男は真由子の前から消え、独りで出産をすることになった。幸いに元気な男児が産声をあげ、智哉と名付けた。父親欄は空白のまま出生届出を市役所に出した。あとで判ったことだが男には妻も子供もあり、今は研究のために渡米しているらしいと。真由子は智哉を独りで育てる決心をしたものの壁は厚く、人の勧めで乳児院の門をくぐるようになったと聡史に話した。

「もういいから、智哉くんと三人でここで暮らそうよ」

聡史は、真由子を力強く抱き寄せた。

「ほんとうにいいの？」

真由子は聡史の暖かい胸につぶやいた。

「ああ」

聡史の腕にさらに力が入った。

「さあ、ご飯にしよう。おばあちゃんはこれからも三人のために力になるよ」

多貴子の声も涙交じりではあったが若い二人の新たな門出を祝うかのように笑顔がこぼれていた。

一刻でも早くとの聡史の優しさに真由子も多貴子も智哉を受け入れる準備にかかった。既に街路灯の灯り

が点く時間ではあったが、ベビー布団を始めとしたさまざまなものを買ひ揃えに走った。その晩、真由子は聡史の部屋に泊まり、乳児院に九時には着けるようにと多貴子に見送られながら横浜に向かった。勤め先には聡史も真由子も熱が出たとので休むと連絡をした。

愛くるしく動き回る智哉に聡史も多貴子も癒されながらの賑やかな家族の誕生となった。幼いこともあって智哉は聡史にも多貴子にもすぐになついた。

真由子は仕事を辞めて専業主婦となった。今は、離れて暮らした一年半を取り戻すことを優先した方がいゝとの聡史の提案だった。多貴子も、自分の部屋にいる時間よりも真由子と智哉のそばにいる方が長かった。パート勤めそっちのけの感じであった。

あたらしい家族の生活は贅沢さえしなければ聡史の稼ぎで充分に賄えた。月に六回ほどのストリートパフォーマンスは智哉を多貴子に預けることでこれまで通り続けることができた。安定した収入とはいかないがそれでも毎月十五万ほどの稼ぎにはなった。すべてを貯蓄にまわし、将来は多貴子を加えて四人で暮らす一軒家を購入したいと計画を立てていた。

幸せな家族としての滑り出しは順調だった。智哉も日毎に大きくもなり言葉も話すようになっていた。来

月には二歳の誕生日を迎える。智哉の誕生日祝いの日  
に多貴子は聡史と真由子にとっておきのビックな提案  
ごとを考えていた。二人が、将来のために家を建てた  
いと計画していることを聞かされていた。しかもその  
家には多貴子の部屋まであるという。コツコツなどと  
貯める必要などない。多貴子には使いきれないほどの  
資産があった。それを切崩して若い二人の希望を、い  
や多貴子の新たな夢を叶えたいと思った。聡史も真由  
子も多貴子も智哉もそれぞれが孤独にさいなまれる暮  
らしをこれまでしてきた。いつも心のどこかで笑いに  
包まれた家族と呼べる心よりどころを欲していた。  
家族を守るためにそれぞれがそれぞれの役割を精一杯  
果たすことへの歓びを味わいたいと思っていた。

「聡史さんごめんなさい。やっぱり私には聡史兄ちゃ  
んでしかありません。智哉の父親が大学病院を解雇さ  
れ、離婚したと知らせてきました。そして智哉の父親  
としてやり直したいと言っています。本当にごめんな  
さい」

聡史が仕事から帰るとテーブルの上に真由子の手紙  
と離婚届、養子縁組の解消届けがおかれていた。あと  
は聡史がサインをすればいいだけになっている。

「ばかだね、あの娘は。このままの生活を続けること  
の方がよっぽど幸せになれるのに。一度、逃げたんだ  
よ、このクズ医者。クビになるような医者はクズに決  
まっている」

聡史の心境を思っていることなのか多貴子自身の夢が  
壊れたことへのいら立ちなのか吐き捨てるような多貴  
子の口調は荒々しいものだった。

「しかたがないさ、智哉も実の父親のもとで暮らすん  
だ。そのほうがいいに決まっている。真由子にとつて  
も・・・」

聡史は自分に言い聞かせるように大きなため息をひ  
とつ吐いてつぶやいた。

「本当に聡史君は人がいいね」

呆れ顔で多貴子は自分の部屋へと引き上げた。

翌日、聡史は市役所が開くのをまって届を出し、職  
場へと向かった。

日曜日、空には大きな白い雲が眩しいほどの晴天。

「ねえ、ママ。今日はピエロさん一人だね。それにあ  
のピエロさん泣いてるよ」